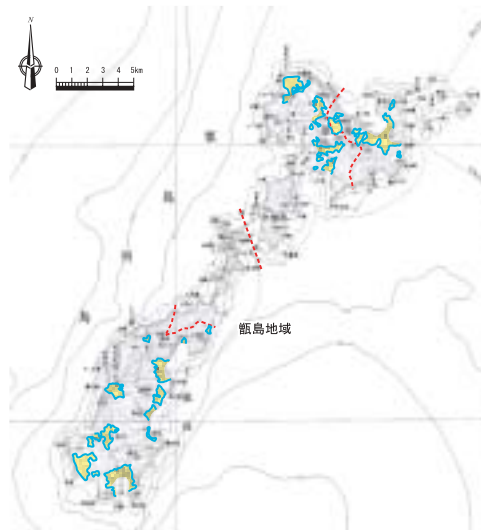


資 料 編

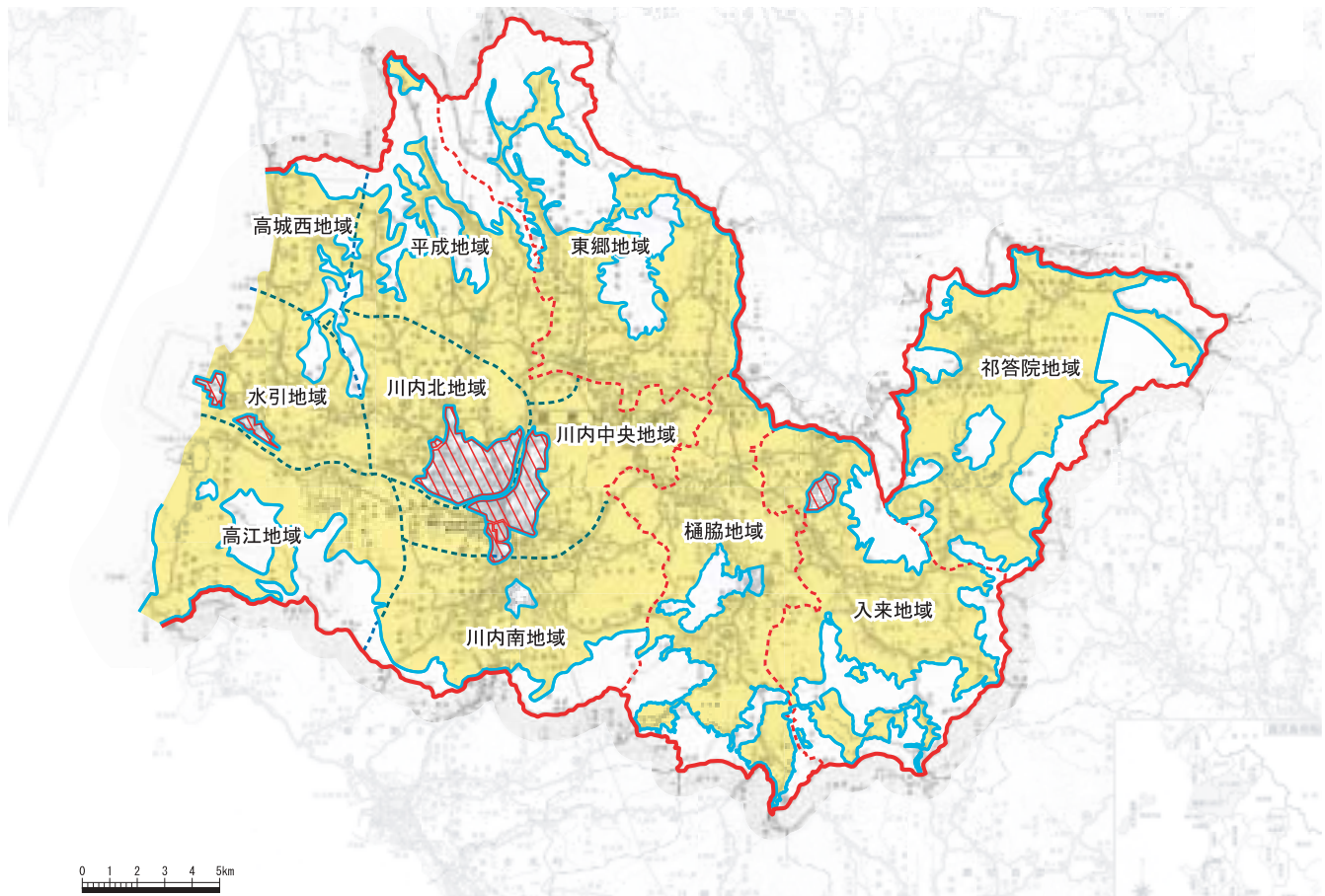
● 環境創造区域，環境配慮区域の設定	1
● 策定の経緯	2
● 薩摩川内市農村環境計画策定委員会運営要領	3
● 薩摩川内市農村環境計画策定委員会委員名簿	5
● 生態系調査	6
● 用語集	29

● 環境創造区域, 環境配慮区域の設定



参照：国土地理院 数値地図 1:200,000 日本Ⅲ 平成9年

凡 例	
	環境配慮区域
●	環境創造区域
	農業振興地域
	用途地域
	市界
	地域界
	地域界（旧川内市）



参照：鹿児島県川薩耕地事務所管内図 1:100,000 平成17年6月 鹿児島県川薩耕地事務所

環境配慮区域：農業農村整備事業を実施するにあたり、回避や最小化などにより、その影響の緩和を図るなど環境に配慮する区域

環境創造区域：農業農村整備事業を実施するにあたり、地域自らが個々の地域の特性を踏まえ、地域の将来のあり方を検討した上で、自然と共生する環境を積極的に創造する区域

▲ 環境配慮・環境創造区域位置図

● 策定の経緯

策定の経緯		主な内容
平成 18 年 12 月	住民アンケート調査	農家を主とする市民 1,110 サンプル
平成 19 年 8 月	地域アンケート調査	策定委員による地域の意見
平成 19 年 6 月 4 日	第 1 回委員会	計画策定の意義と策定方法 市の現況について検討
平成 18 年 12 月 平成 19 年 1 月～3 月, 10 月	生態系調査	代表的な 7 地点の現地調査
平成 19 年 11 月 16 日	第 2 回委員会	計画書素案について検討
平成 19 年 12 月 19 日	企画経済委員会	農村環境計画の概要報告
平成 20 年 1 月 25 日～2 月 22 日	パブリックコメント募集	1 名 12 件の意見提出
平成 20 年 3 月 3 日	第 3 回委員会	計画書案について検討
平成 20 年 3 月 14 日	企画経済委員会	農村環境計画策定の報告

● 薩摩川内市農村環境計画策定委員会運営要領

(設置)

第1条 農村環境計画の策定にあたり，必要な事項の審議および調整を行うために，薩摩川内市農村環境計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(掌握事務)

第2条 委員会の掌握事務は次の通りとする。

- (1) 計画策定に必要な情報の収集および提供に関する事項。
- (2) 計画原案の策定に関する事項。
- (3) その他，計画策定作業に関して必要な事項。

(組織)

第3条 委員会は，委員25名以内で組織する。

2 委員は次の各号に掲げる者のうちから，市長がこれを委嘱する。

- (1) 学識者
- (2) 地域代表者
- (3) 行政機関代表者
- (4) その他市長が必要と認める者

3 委員の任期は第2条の掌握事務が完了するまでとする。ただし，前条の職を退いた者は，委員の任を解かれるものとし，後任者は掌握事務を引き継ぐものとする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長及び副委員長を置く。

- (1) 委員長及び副委員長は，委員の互選によりこれを決める。
- (2) 委員長は委員会を代表して会務を総理する。
- (3) 副委員長は，委員長を補佐する。

(策定委員会等)

第5条 委員会の会議は必要に応じて委員長が召集する。

- (1) 委員長は会議の議長となる。
- (2) 委員長は構成員全員の出席を求める必要がないときは，一部の構成員の出席を求めて議会を開催することができる。
- (3) 委員長は必要と認める場合，関係者の出席を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務局は耕地課内に置く。

(その他)

第7条 この要領に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要領は平成19年6月4日から施行する。

● 薩摩川内市農村環境計画策定委員会委員名簿

	区 分	役 職	氏 名
1	学識経験者	鹿児島大学農学部 教授	モミイ カズロウ 舩井 和朗
2	学識経験者	鹿児島大学農学部 客員教授	サメジマ マサミチ 鮫島 正道
3	地域代表者（川内地域）	川内市土地改良区 理事長	カミマン マサノリ 上萬 正則
4	地域代表者（川内地域）	陽成地区コミュニティ協議会 会長	クイビラ アキオ 終平 昭男
5	地域代表者（川内地域）	薩摩川内市衛生自治団体連合会 会長	ハルタ カズミツ 春田 和満
6	地域代表者（樋脇地域）	小野土地改良区 理事長	タケクマ マサヒロ 竹隈 雅弘
7	地域代表者（樋脇地域）	野下地区コミュニティ協議会 会長	イガワ ハルオ 井川 春夫
8	地域代表者（入来地域）	入来町土地改良区 理事長	カンワギ ハジメ 柏木 俣
9	地域代表者（入来地域）	薩摩川内市農業委員会 委員	ホリノウチ 堀之内 まゆみ
10	地域代表者（東郷地域）	山田土地改良区 理事長	フルサト サダヨシ 古里 貞義
11	地域代表者（東郷地域）	鳥丸地区コミュニティ協議会 会長	カワハラ ヤスヒサ 川原 泰久
12	地域代表者（祁答院地域）	祁答院町土地改良区 理事長	ハギハラ イサオ 萩原 功
13	地域代表者（祁答院地域）	轟地区コミュニティ協議会 会長	ホウマン テルミ 宝満 照美
14	地域代表者（甑地域）	甑農業委員会 会長	クラノ カズオ 藏野 量夫
15	地域代表者（甑地域）	甑農業委員会 会長代理	キタノ ヒロフミ 北蘭 廣文
16	鹿児島県	北薩地域振興局農林水産部農村整備課長	オヤマ ナオト 小山 直人
17	薩摩川内市	農林水産部長	イシバシリ ナオノブ 石走 直伸
18	薩摩川内市	農政課長	アリシマ シンイチ 有島 進一
19	薩摩川内市	企画政策課長	スエナガ タカミツ 末永 隆光
20	薩摩川内市	環境課長	タバタ イツロウ 田畑 逸郎
21	薩摩川内市	社会教育課長	カワハラ タカアキ 川原 隆明
22	薩摩川内市	農業委員会事務局長	スズキ カズヒロ 鈴木 和彦
23	薩摩川内市	耕地課長	マエダ コウジ 前田 孝二
24	事務局	耕地課	
25	コンサルタント	（財）九州環境管理協会	

● 生態系調査

1. 調査概要

本市の自然環境に関する現況を把握し、今後の課題や方針の検討材料にするとともに、本市において農村環境毎のタイプ区分を行い、その類似のエリアで自然環境に配慮した「農業農村整備事業」を行うための指針とします。

(1)調査日

平成 18 年 12 月 20～21 日（冬）、平成 19 年 1 月 12 日（冬）、平成 19 年 2 月 9～10 日と 3 月 7 日（早春）、平成 19 年 6 月 18～19 日（夏）、10 月 2～4 日（秋）の 4 季

(2)調査項目

植物・陸生動物・水生動物のルート上の目視観察

(3)調査内容

農村環境を代表する 7 地点の自然環境、生活環境、生産環境の踏査の他、生態系調査を行いました。

- 地形図や航空写真を基に、予め、作成した植生予察図を現地で確認し、加筆修正しました。生物の生息環境の把握を主目的としました。
- 調査中に確認した動物（ほ乳類、は虫類、両生類、水生生物）、及び植物について記録を行いました。
- 希少な動植物種（種の保存法、国レッドデータブック、県レッドデータブック）が確認された場合は、生育地点を記録し、可能な範囲で写真撮影を行いました。保全対策の検討では、動植物は環境省レッドデータブックに記載されている種、または鹿児島県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類以上のランクに記載されている種を希少な動植物として扱いました。

(4)調査地点

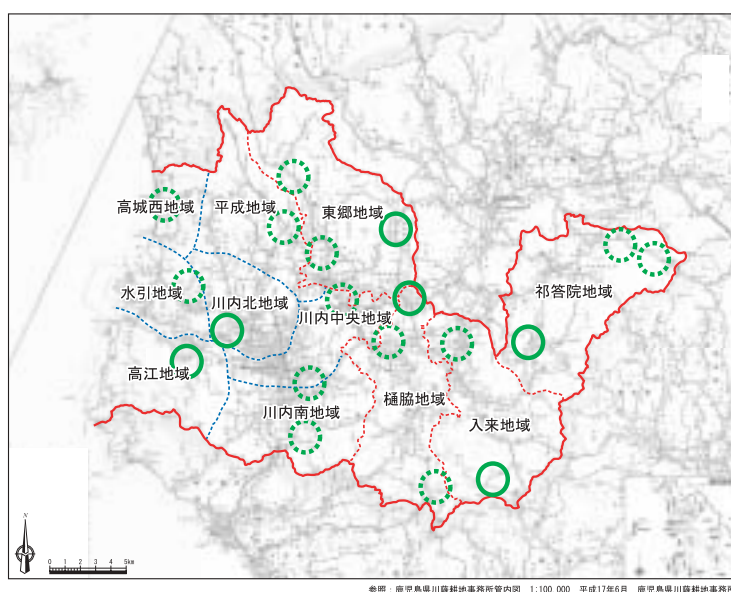
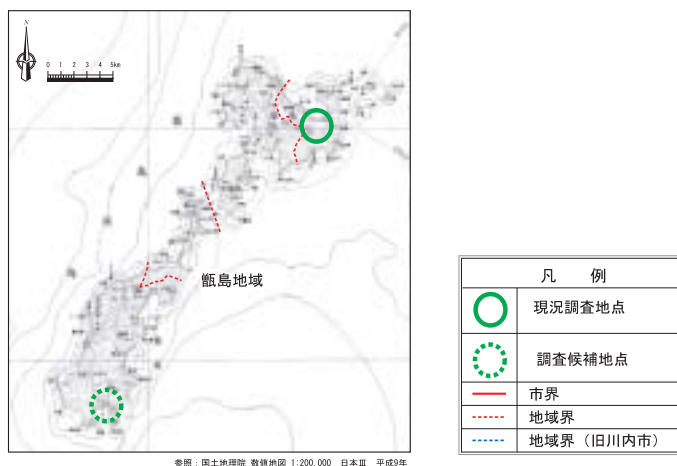
本市の農業振興地域内を地形、水系、土地利用、ほ場整備状況など環境の違いにより 6 つのゾーンに分けました。踏査により、それぞれのゾーンから代表的な地点を、調査対象地点として 7 地点選定しました。

調査地点を次頁に示します。調査地点内に調査ルートを設定し、歩きながら観察を行いました。

2. 調査地区の選定

対象地域は、旧市町村を基本に川内北地域、川内中央地域、川内南地域、水引地域、高江地域、平成地域、高城西地域、樋脇地域、入来地域、東郷地域、祁答院地域、甑島地域の9区分を考慮しながら、農業振興地域を、主に川内川下流の平地水田、川内川中流や支流の平地水田、島嶼の水田と畑地、山地の棚田、中山間地や盆地の農地、都市と農村が混在する水田に類別しました。調査地区は次の図の21地区を候補とし、7地区を各類型の代表的な農地として選定しました。

- 川内川下流の平地水田・・・高江地区（高江地域）
- 川内川中流の平地水田・・・倉野地区（樋脇地域）、山田地区（東郷地域）
- 島嶼の水田と畑地・・・・・・里地区（甑島地域）
- 山地の棚田・・・・・・内之尾地区（入来地域）
- 中山間地の農地・・・・・・藺牟田地区（祁答院地域）
- 都市近郊の農地・・・・・・五代地区（川内北地域）



▲ 現地調査地区の位置

3. 出現種リスト

(1) 植 物

植物は 41 科 89 種が確認されました。希少種はナギ（準危惧）、マツモ（準危惧）、ユズリハ（準危惧）、テイカカズラ（準危惧）、ヤナギモ（準危惧）、ツクシショウジョウバカマ（絶滅危惧Ⅱ）、ジャノヒゲ（準危惧）、ムツオレグサ（準危惧）の 8 種でした。

表 1 確認種一覧表

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	ヒカゲノカズラ科	トウゲシバ				○					
2	ヘゴ科	ヘゴ			○						
3	ホングウシダ科	ホラシノブ				○					
4	シシガシラ科	コモチシダ					○				
5	ヒメシダ科	ホシダ					○				
6		ミゾシダ				○					
7	ウラボシ科	ノキシノブ				○					
8	スギ科	スギ		○		○	○	○			
9	イヌマキ科	イヌマキ				○		○	○		
10		ナギ						○			準危惧
11	ブナ科	クリ				○					
12		ツブラジイ				○	○				
13		クヌギ						○			
14	ニレ科	ムクノキ					○				
15	イラクサ科	カラムシ			○						
16		サンショウソウ				○					
17	タデ科	ツルソバ			○						
18		ミゾソバ			○						
19		スイバ	○	○	○		○	○	○		
20		ギシギシ			○				○		
21	ナデシコ科	オランダミミナグサ	○	○			○		○		
22		ノミノフスマ			○			○			
23	クスノキ科	ヤブニッケイ					○				
24	キンボウゲ科	ヒメウズ				○					
25		ウマノアシガタ				○					
26		キツネノボタン	○								
27	マツモ科	マツモ	○								準危惧
28	ツバキ科	ヤブツバキ			○		○				
29		ツバキ				○					
30		ハマヒサカキ			○						
31		ヒサカキ			○	○					
32		チャノキ				○			○		
33	ケシ科	ムラサキケマン					○				
34	アブラナ科	タカナ				○					
35		ナズナ		○							
36		タネツケバナ	○		○	○	○				
37		スカシタゴボウ	○								
38	バラ科	ホウロクイチゴ	○			○					
39	マメ科	ゲンゲ	○	○		○		○			
40		ソラマメ				○					
41		カラスノエンドウ		○			○				
42		カスマグサ	○			○					
43	フウロソウ科	アメリカフウロ	○						○		
44	ユズリハ科	ユズリハ						○			準危惧
45	モチノキ科	タラヨウ				○					

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
46	ブドウ科	ツタ			○						
47	アオイ科	サキシマフヨウ			○						
48	ウコギ科	キツタ						○			
49	セリ科	ツボクサ					○				
50		セリ	○			○					
51	カキノキ科	カキノキ						○			
52	キョウチクトウ科	テイカカズラ			○						準危惧
53	アカネ科	タニワタリノキ				○					
54		アリドオシ					○				
55	シソ科	カキドオシ				○					
56		ホトケノザ	○								
57	ゴマノハグサ科	トキワハゼ	○								
58	オオバコ科	オオバコ		○							
59	キク科	ヨモギ	○	○	○	○	○	○			
60		タカサブロウ	○								
61		ツワブキ			○						
62		ハハコグサ		○		○					
63		オオジシバリ		○		○					
64		ヨメナ	○	○		○					
65		セイタカアワダチソウ	○						○		
66		オニタビラコ	○	○		○					
67	トチカガミ科	オオカナダモ					○				
68	ヒルムシロ科	ヤナギモ	○				○				準危惧
69	ユリ科	ノビル	○			○		○			
70		ツクシショウジョウバカマ				○					危惧Ⅱ
71	ユリ科	ジャノヒゲ	○	○				○			準危惧
72		サツマサンキライ			○						
73	ヒガンバナ科	ヒガンバナ		○				○			
74	イグサ科	スズメノヤリ		○		○					
75	イネ科	スズメノテッポウ	○	○	○			○			
76		カズノコグサ	○								
77		ジュズダマ		○							
78		ギョウギシバ					○				
79		ムツオレグサ		○							準危惧
80		チガヤ	○	○	○	○	○	○	○		
81		ハチジョウススキ			○						
82		ススキ		○		○	○				
83		シマスズメノヒエ		○							
84		スズメノヒエ					○		○		
85		モウソウチク				○		○			
86		メダケ		○	○			○			
87		ツクシスズメノカタビラ	○	○	○	○	○	○			
88		イタチガヤ				○					
89		ノシバ						○			
計	41	89	25	23	22	37	22	20	9	0	8

注) 1. 表中の○は確認したことを示す。

2. 種名、分類体系は、「植物目録」(環境庁自然保護局編, 1987)による。

3. 環境省は、「環境省報道発表資料 植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて」(環境省, 2007年)による。

4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003年)による。

ナギ イヌマキ科	
	
カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	常緑の高木
分 布(県内)	各地に見られるが、本来の野生なのか、栽培や野生化した集団との区別が困難である。
生育環境	山地斜面や谷筋
生育状況	点在的
存続をおびやかしている原因	森林伐採, 林道開発, 園芸採取

マツモ マツモ科	
	
カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	止水域に生息する沈水性の水草
分 布(県内)	県全域の池
生育環境	池や流れの緩やかな水域
生育状況	点在的に分布するが多いものではない
存続をおびやかしている原因	湖沼開発, 埋め立て, 水質汚濁, 農薬汚染

ユズリハ

ユズリハ科



カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	—
分 布(県内)	霧島神宮, 金峰山, 内之浦, 高山, 野首岳, 辺塚, 屋久島, 諏訪之瀬島, 徳之島
生育環境	—
生育状況	—
存続をおびやかしている原因	—

テイカカズラ

キョウチクトウ科



カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	—
分 布(県内)	甌島, 鹿児島, 磯間岳, 山川, 佐多, 宇治, 竹島, 黒島
生育環境	—
生育状況	—
存続をおびやかしている原因	—

ヤナギモ ヒルムシロ科	
	
カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	水中生の多年生水草
分 布 (県内)	大口, 鹿児島, 千貫平, 馬毛島, 奄美大島
生育環境	流水
生育状況	比較的希, 生育地激減
存続をおびやかしている原因	河川開発, 水質汚濁, 土地造成

ツクシショウジョウバカマ ユリ科	
	
カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)危惧Ⅱ
生物学的特性	常緑の多年草
分 布(県内)	下甑島, 柴尾山, 霧島山系, 鹿児島, 薩摩半島中南部, 財部, 桜島, 高隈山系, 田代, 屋久島
生育環境	湿潤な林床や林縁, 岩場
生育状況	やや普通な種であるが, 生育環境は限定されている
存続をおびやかしている原因	森林伐採, 林道開発, 観賞用採取

ジャノヒゲ

ユリ科



カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	常緑の多年草
分 布(県内)	県北西部, 新川溪谷, 錫山, 坊津, 奄美大島, 喜界島
生育環境	林縁や路傍の草地
生育状況	散在的で, 本来の野生か, 栽培から野生化したのかがはっきりしないことがある。
存続をおびやかしている原因	草地開発, 農地整理

ムツオレグサ

イネ科



カテゴリー	(環境省)なし (鹿児島県)準危惧
生物学的特性	冬緑的な多年草
分 布(県内)	県北部, 薩摩半島, 大隅半島, 奄美大島
生育環境	水田や水路, 池縁
生育状況	耕地雑草的な植物である
存続をおびやかしている原因	耕地整理, 農道開発

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物]

(2)陸生・水生動物

①ほ乳類

現地調査の結果、5科6種が確認されました。出現状況を表2に示します。

希少なほ乳類は確認されていません。

表2 ほ乳類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	モグラ科	コウベモグラ	○	○	○	○	○	○	○		
2	イヌ科	タヌキ	○	○					○		
3	イタチ科	テン	○				○				
4		イタチ科の一種		○	○	○	○	○			
5	イノシシ科	ニホンイノシシ	○	○		○		○			
6	シカ科	ニホンシカ				○					
計	5科	6種	4	4	2	4	3	3	2	0	0

- 注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。
 2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」(環境庁, 1993)による。
 3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」(環境省, 2002年)による。
 4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003年)による。

②は虫類

現地調査の結果、1科2種が確認されました。出現状況を表3に示します。

希少なは虫類は確認されていません。

表3 は虫類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	ナミヘビ科	シマヘビ	○			○	○	○			
2		ヤマカガシ						○			
計	1科	2種	1	0	0	1	1	2	0	0	0

- 注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。
 2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」(環境庁, 1993)による。
 3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」(環境省, 2002年)による。
 4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003年)による。

③両生類

現地調査の結果、4科9種が確認されました。出現状況を表4に示します。

希少な両生類はアカハライモリ(環境省レッドデータブック, 鹿児島県レッドデータブック共に準危惧)が4ヶ所, トノサマガエル(鹿児島県レッドデータブックで準危惧)が3ヶ所で確認されました。

表 4 両生類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	イモリ科	アカハライモリ	○	○	○			○		準危惧	準危惧
2	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル			○						
3	アカガエル科	ニホンアカガエル				○	○	○			
4		ツチガエル	○	○		○	○	○	○		
5		ヌマガエル	○	○		○	○	○	○		
6		トノサマガエル			○	○	○				準危惧
7		ニホンアマガエル		○			○		○		
8		アカガエル属の一種	○	○		○		○	○		
9	アオガエル科	カジカガエル				○					
計	4 科	9 種	4	5	3	6	5	5	4	1	2

注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。

2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」(環境庁, 1993)による。

3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」(環境省, 2002 年)による。

4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003 年)による。

④魚 類

現地調査の結果、9 科 18 種が確認されました。出現状況を表 5 に示します。

希少な魚類はヤリタナゴ(環境省レッドデータブックで危惧)が 1 ケ所、ドジョウ(鹿児島県レッドデータブックで準危惧)が 5 ケ所、ヤマトシマドジョウ(環境省レッドデータブックで危惧Ⅱ)が 2 ケ所、メダカ(環境省レッドデータブックで危惧Ⅱ, 鹿児島県レッドデータブックで準危惧)が 3 ケ所で確認されました。

表 5 魚類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	イセゴイ科	イセゴイ							○		
2	コイ科	カワムツ	○	○		○	○				
3		オイカワ	○	○			○		○		
4		タカハヤ	○			○		○			
5		コイ		○							
6		ギンブナ	○	○							
7		カマツカ	○	○							
8		ヤリタナゴ	○							準危惧	
9	ナマズ科	ナマズ	○								
10	ドジョウ科	ドジョウ	○		○	○	○	○			準危惧
11		ヤマトシマドジョウ	○	○						危惧Ⅱ	
12	ボラ科	ボラ属の一種			○						

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
13	メダカ科	メダカ	○		○				○	危惧Ⅱ	準危惧
14	カダヤシ科	カダヤシ			○						
15	ドンコ科	ドンコ	○	○			○	○			
16	ハゼ科	ウキゴリ					○				
17		トウヨシノボリ	○	○			○	○			
18		クロヨシノボリ			○						
計	9 科	18 種	12	8	5	3	6	4	3	3	2

- 注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。
 2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」(環境庁, 1993)による。
 3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」(環境省, 2002年)による。
 4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003年)による。

⑤甲殻類

現地調査の結果、4科10種が確認されました。出現状況を表6に示します。

希少な甲殻類は確認されていません。

表6 甲殻類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	蘭牟田	五代		
1	ヌマエビ科	トゲナシヌマエビ			○						
2		ミゾレヌマエビ	○		○				○		
3	テナガエビ科	ミナミテナガエビ	○		○		○	○			
4		ヤマトテナガエビ	○								
5		テナガエビ属一種	○	○	○		○				
6	サワガニ科	サワガニ				○		○	○		
7	イワガニ科	モクズガニ		○	○						
8		オオヒライソガニ			○						
9		アカテガニ							○		
10		クロベンケイガニ							○		
計	4 科	10 種	4	2	6	1	2	2	4	0	0

- 注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。
 2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」(環境庁, 1993)による。
 3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」(環境省, 2002年)による。
 4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」(鹿児島県, 2003年)による。

⑥貝 類

現地調査の結果、9科10種が確認されました。出現状況を表7に示します。

希少な貝類はモノアラガイ（環境省レッドデータブック、鹿児島県レッドデータブック共に準危惧）が2ヶ所、マルタニシ（環境省レッドデータブック、鹿児島県レッドデータブック共に準危惧）が2ヶ所、イシマキガイ（鹿児島県レッドデータブックで準危惧）が2ヶ所、マシジミ（環境省レッドデータブックで準危惧）が3ヶ所で確認されました。

表7 貝類出現種一覧

確認種分類			調査地点							環境省	鹿児島県
No.	科名	種名	高江	山田	里	内之尾	倉野	藺牟田	五代		
1	モノアラガイ科	モノアラガイ	○				○			準危惧	準危惧
2	サカマキガイ科	サカマキガイ	○	○	○		○		○		
3	ヒラマキガイ科	ヒラマキミズマイマイ	○				○				
4	タニシ科	マルタニシ			○			○		準危惧	準危惧
5		ヒメタニシ	○								
6	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	○				○		○		
7	カワニナ科	カワニナ	○	○	○	○	○	○			
8	アマオブネガイ科	イシマキガイ			○				○		準危惧
9	シジミガイ科	マシジミ	○		○		○			準危惧	
10	イシガイ科	イシガイ科の一種					○				
計	9科	10種	7	2	5	1	7	2	3	3	3

- 注) 1. 表中の○は確認した個体数や種数を示す。
 2. 種名、分類体系は、「日本産野生生物目録」（環境庁、1993）による。
 3. 環境省は「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」（環境省、2002年）による。
 4. 鹿児島県は「鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物」（鹿児島県、2003年）による。

⑦希少な動物(陸生, 水生動物)

現地調査の結果、レッドデータブックに記載されている希少な動物はアカハライモリ（環境省レッドデータブック、鹿児島県レッドデータブック共に準危惧）、トノサマガエル（鹿児島県レッドデータブックで準危惧）、ヤリタナゴ（環境省レッドデータブックで準危惧）、ドジョウ（鹿児島県レッドデータブックで準危惧）、ヤマトシマドジョウ（環境省レッドデータブックで危惧Ⅱ）、メダカ（環境省レッドデータブックで危惧Ⅱ、鹿児島県レッドデータブックで薩摩型は準危惧）、モノアラガイ（環境省レッドデータブック、鹿児島県レッドデータブック共に準危惧）、マルタニシ（環境省レッドデータブック、鹿児島県レッドデータブック共に準危惧）、イシマキガイ（鹿児島県レッドデータブックで準危惧）、マシジミ（環境省レッドデータブックで準危惧）が確認されました。なお、ヤリタナゴは鹿児島県において移入種であり、希少種としては取り扱われていません。

アカハライモリ 両生類 有尾目 イモリ科	
	
カテゴリー	(環境省) 準絶滅危惧 (鹿児島県) 準絶滅危惧
種の解説	全長雄 70～115mm, 雌 80～140mm。産卵期は 4 月～7 月上旬にかけてで、この時期と秋に雄は求愛行動を行う。卵は水中の落ち葉や水草などに一つずつ産み付けられる。孵化した幼生は水中の小動物を食べて成長する。夏から秋にかけて変態し、上陸する。成体の食物はミズ、昆虫、オタマジャクシなど。
分 布	県内では島嶼を除き、ほぼ全域で確認され、島嶼では長島、甌島列島に生息している。文献上は種子島、屋久島、トカラ列島の中之島から記録があるが、これらは最近の調査でも確認できず、誤りであると考えられる。
生息環境	用水路、水田、小川、ため池、水たまりなどの比較的浅いところに生息する。止水ないし、緩やかな流れで、植物が多く生育し、底質が泥質で、水は澄んだ場所を好む傾向がある。また、餌となるオタマジャクシや水生昆虫が多い場所が好まれる。水田では場整備の進んだところではあまり見られず、山間部の狭い水田に多い。水中に多いが、水場周辺の陸上にも見られ、湿った物陰に潜んでいることが多い。特に雨の日は、地表を歩いている姿がしばしば見られ、道路上で輪禍に遭うことも少なくない。
生息状況	かつては県内の分布域ほぼ全域でごく普通に見られていたが、平地では水田の整備と共に姿を消したところが多い。山地やそれに近い場所では、現在でも比較的良好に見られる。
存続をおびやかしている原因	平地の水田はほ場整備や農薬の使用により、生息に適さない環境になり、その周辺の用水路や小川、ため池などもコンクリートで固められ、餌となる小動物や隠れ場所が減り、水流も早くなるなどして環境が悪化している。
トノサマガエル 両生類 無尾目 アカガエル科	
	
カテゴリー	(鹿児島県) 準絶滅危惧
種の解説	成体の体長は雄が 38～81mm, 雌が 63～94mm。日本産のカエルでは唯一、雄と雌の体色が明瞭に異なり、雄は全体に明るい黄緑色、雌は黒く明瞭な斑紋が多数ある。繁殖は4～6月で、孵化した幼生は6～9月にかけて変態し、上陸する。昆虫やクモのほか、他種のカエルなど比較的大きな餌も食べ、希に共食いも見られる。
分 布	島嶼を除き、ほぼ全域の平地、丘陵地に分布するが、薩摩半島南部ではほとんど確認されていない。離島では種子島で確認されている。
生息環境	繁殖場所・生活場所ともほとんど水田に依存しているが、河川の中流域や下流域の河川敷にも見られることもある。水田の中でもほ場整備が進んだところには少なく、半放棄水田や山間部の水田など、周辺に植物が生い茂るような南畝で多く見られる。非繁殖期には水辺から離れた草地などでも生活する。
生息状況	同様に水田に依存する種でもヌマガエルやニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエルなどは、ほ場整備が進んだところでも高密度で生息しているが、本種はそのような場所ではあまり見られない。生息に適した水田は減っており、特に薩摩半島では本種がほとんど見られなくなりつつある。大隅半島や川内市・大口市など北薩地方ではまだ比較的高密度で生息する水田が残っている。なお、本種は環境省レッドデータブックには掲載されていないが、近年、本県に限らず各地で急激に減少していることが指摘されている。
存続をおびやかしている原因	ほ場整備の進捗とともに、生息に適する自然環境を残す水田が急速に減少しつつある。また、河川整備の進捗とともに、植物が生育し繁殖に適した水たまりを備えた広い河川敷もなくなりつつある。

〔資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物〕

ドジョウ 魚類 コイ目 ドジョウ科	
	
カテゴリー	(鹿児島県) 準絶滅危惧
種の解説	成魚の全長は最大で 200mm 近くに達するが、通常見られるものは 100mm 以下のものが多い。本種は河川やため池のような恒久的水域と、水田のような一時的水域を生活史に合わせて移動し、うまく使い分けている。繁殖期は 6～7 月頃で梅雨の時期にほぼ一致する。産卵は水田や湿地のような浅い止水域で夜間に行われる。夏の間、水田で過ごし、落水とともに河川やため池に移動する。泥中の有機物や小動物を餌とし、1 年で成熟する。
分 布	薩摩半島、大隅半島、甌島列島、種子島、馬毛島、奄美大島、喜界島から知られる。
生息環境	山間部から河口に近い平野部まで広く生息する。河川本流には少なく、寄り洲を流れる細流やワンド、水田地帯を流れる用水路やため池、湿地、放棄水田などに見られることが多い。ほ場整備されていない山間部の水田地帯では特に多数生息していることがある。底質は泥を主体とする砂泥で水生植物が繁茂している場所を好む。
生息状況	川内川流域とその周辺や万之瀬川流域、鹿児島市の永田川流域、肝属川流域とその周辺は比較的多産する。ほ場が整備され近代的な稲作が行われるようになった地域では、用水路のヒューム管化や樋門の設置により、本種の生活史に伴う移動が妨げられる場所が多く見られ、生息数が減少していると考えられる。
存続をおびやかしている原因	主な生息環境は水田地帯であるため、ほ場整備や河川工事、宅地造成などにより影響を受けやすい。このほか、湿地や放棄された水田が遷移に伴って陸地化することにより、生息地が消滅することもありうる。

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物]

ヤマトシマドジョウ 魚類 コイ目 ドジョウ科	
	
カテゴリー	(環境省) 絶滅危惧Ⅱ類
種の解説	全長 13cm 程度で、雌の方がやや大型になる。本種はヨーロッパに分布するタイリクシマドジョウと同種とされていたが、核型の違いにより別種とされた。
分 布	日本固有種で九州及び山口県に分布する。
生息環境	河川中流に生息しており、一生を河川内で過ごし、水田などには侵入しない。河川では流れの緩やかな平瀬や淵で河床に砂が堆積した場所を好む。繁殖生態についてはよく判っていない。
生息状況	県内では薩摩半島のみ分布し、江内川・川内川水系と川内市内の小河川・万之瀬川・網掛川・別府川・永田川に生息する。万之瀬川は分布の南限である。
存続をおびやかしている原因	河川環境の悪化。

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物・川の生き物図鑑・日本の淡水魚]

メダカ 魚類 ダツ目 メダカ科	
	
カテゴリー	(環境省)絶滅危惧Ⅱ類 (鹿児島県)薩摩型:準絶滅危惧, 大隅型:準絶滅危惧, 琉球型:絶滅危惧Ⅰ類
種の解説	成魚の全長は 40mm 程度。止水域の水面付近において、数個体から数十個体の群れを形成していることが多い。純淡水魚であるが、塩分に対する耐性を持ち、汽水域に現れることもある。繁殖期は春から秋で雌は泳ぎながら卵塊を水草などに付着させる。主にプランクトン食であるが、水面に落下した小型の昆虫なども捕食する。日本には北日本集団と南日本集団が存在し、南日本集団は遺伝的に異なる 9 つの型に分けられる。本県下には薩摩型、大隅型、琉球型の 3 つの型が存在する。
分 布	県内には 3 つの型が存在する。薩摩型:薩摩半島、甌島列島。大隅型:大隅半島。琉球型:種子島、馬毛島、奄美大島、喜界島、加計呂麻島。
生息環境	河川、湖沼、ダム湖、ため池、細流、湿地、水田などに生息する。本種の生活は水田に強く依存しており、ほ場整備されていない水田地帯を流れる用水路や、それに繋がるため池などには特に多い。休耕田や放棄水田が湿地状になった場所にも現れる。
生息状況	薩摩型:川内川水系とその周辺、万之瀬川水系、鹿児島市の永田川には比較的多産する。ただし、永田川については周辺の水田の減少と宅地化が進行し、生息域が急速に狭まっていると考えられる。下甌島では 2001 年に採集されたが、個体数は極めて少ない。
存続をおびやかしている原因	主な生息環境は水田地帯であるため、ほ場整備や河川工事により影響を受けやすい。また、ブラックバス類やブルーギル、ティラピア類による捕食、カダヤシやグッピーによる競合のほか、過密度なコイの放流も減少の一因と考えられている。湿地や放棄水田が、遷移に伴って陸地化することにより、生息地が消滅することもありうる。さらに、異なる系統の放流に伴う遺伝的攪乱も懸念される。

〔資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物・川の生き物図鑑・〕

モノアラガイ 貝類 基眼目 モノアラガイ科



カテゴリー	(環境省)準絶滅危惧 (鹿児島県)準絶滅危惧
種の解説	成貝で殻長 21mm, 殻径 14mm 内外。
分 布	北海道, 本州, 四国, 九州, トカラ列島に分布する。鹿児島県は分布の南限である。
生息環境	湧水池や湖沼河川に生息する。
生息状況	湖沼や河川環境の悪化によって生息地が減っている。大型の生貝を見かけることはほとんど出来なくなった。生息地が激減している。
存続をおびやかしている原因	護岸工事や生活排水の流入などによる湖沼河川環境の悪化が最大の原因である。

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物]

マルタニシ 貝類 盤足目 タニシ科



カテゴリー	(環境省)準絶滅危惧 (鹿児島県)準絶滅危惧
種の解説	成貝で殻長 60mm, 殻径 45mm 内外。卵胎生。
分 布	本州から奄美諸島に分布する。鹿児島県は分布の南限である。
生息環境	比較的流れの少ない止水的な環境の湖沼に生息する。
生息状況	湖沼環境の悪化によって生息地が減っている。生息地が激減している。
存続をおびやかしている原因	護岸工事や生活排水の流入などによる湖沼環境の悪化が最大の原因である。

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物]

イシマキガイ 貝類 アマオブネガイ目 アマオブネガイ科



カテゴリー	(鹿児島県)準絶滅危惧
種の解説	成貝で10～30mm内外。螺塔は低く、大型個体では殻頂部が浸食されているものが多い。淡水域で卵塊を石の上に産み付ける。幼生は河口に下り、浮遊生活期を経て河口汽水域で夏～秋に定着する。定着した幼貝は汽水域で越冬した後、翌年の幼貝が定着する9月頃から一斉に川を遡上する。一部汽水域にとどまる個体もある。上流ほど個体の殻平均サイズが大きくなる。
分 布	太平洋側は房総半島以南、日本海側は能登半島以南に分布する。鹿児島県は分布の南限地にあたる。
生息環境	大小河川の汽水域から淡水域に生息する。藻食性の傾向が強く、流水や止水の岩の上に付着している。カワニナなどの他の淡水性巻貝よりも岩に付着する力が強い。冬季は淵に移動する傾向がある。
生息状況	鹿児島県では九州南部から奄美諸島までの広い範囲の河川の汽水域に生息しているが、生活排水などによる汚染の進んだ河川では絶滅している。本種の幼貝の定着は、河川汽水域で行われるため、汽水域の環境が劣悪な河川でも絶滅している。
存続をおびやかしている原因	河川改修工事などによる生息地の破壊、河岸のコンクリート化、下水などによる河川水の水質汚濁、河口海岸の水質の悪化などによって生息が危ぶまれている。

[資料：鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物]

マシジミ 貝類 マルスダレガイ目 シジミガイ科



カテゴリー	(環境省)準絶滅危惧
種の解説	成貝は殻長 40mm、殻高 30mm で成長肋が密にある。幼貝は黄緑色で殻表に焼けこげたような黒色斑が出る。成長すると殻は黒褐色から黒色になる。内面は濃紫色。雌雄異体で卵胎生。5月下旬から8月中旬にかけて幼貝を産む。産出された幼貝は直ちに底生生活にはいる。
分 布	本州、四国、九州に分布。奄美大島は本種の分布の南限地となっている。
生息環境	中流域の砂礫底にすむ。
生息状況	県内では鹿児島市、奄美大島(龍郷町)、日置郡吹上町、川内川では宮之城、大口市、菱刈町など。
存続をおびやかしている原因	河川の改変、水質汚濁、農薬の使用、移入種との交雑に懸念など。

[資料：川の生き物図鑑他]